

地域特産種増殖技術開発事業調査

タカセガイ（要約）

久保弘文・玉城英信*・勝俣亜生

本調査の結果は昭和63年度地域特産種増殖技術開発事業報告書に報告したので、ここにはその要約を示した。

1. 基礎調査

（市場調査）

- ・過去6年の貝殻の漁獲量と生産額は恩納が58年に8 ton：420万円、伊平屋が59年に10 ton：380万円をピークにして、その後は両方とも減少の一途をたどっている。
- ・恩納村における身のkg単価は2,000円～4,550円の範囲内にあり、12月に最高、9月に最低となる。
- ・恩納村のタカセガイの平均漁獲サイズ1個の貝殻価格は259.5±92.7g/個で135±48円となる。
- ・漁獲物殻径組成は恩納99.8±12.4mm (n=170)、宮古119.8±15.9mm (n=55)、八重山は96.25mm±13.7mm (n=192)で、漁労体数の少ない宮古島が最も大型であった。

（親貝放流による調査）

- ・禁漁区域は他区域と比べ、天然貝の発見個体数が9cm以上で最も多く、9cm以下でも2番目に多い。
- ・親貝は放流後166～572日の間、半径約900mの範囲内に留まり、概ね、さらに遠くへは移動しない。

2. 種苗生産技術開発（基礎技術開発試験）

- ・産卵誘発法の検証、稚貝の塩分耐性、5mmと16mmサイズの摂餌量と珪藻増殖量の関係などが明らかとなった。産卵誘発は紫外線照射海水と夜間止水の組合せが最も有効であった。塩分濃度は70%海水に対し2ないし3mm稚貝にはほとんど影響がなかった。摂餌量は5.5mm稚貝が水温20.9度の条件で0.25mg/日/個、22.7度では0.61～0.74mg/日/個、17.3mm稚貝は21.5度で7.3～7.7mg/日/個、であった。

3. 資源添加技術開発

（室内試験）

- ・最も高水温3時間40℃内外でも死亡が認められず、放流場の高水温環境には耐え得る能力がある。
- ・位置要求はタカセガイとナガウニA型が時刻や照度と無関係に開放的な場所を好み、ニシキウズガイは夜行性で昼間は物陰に隠れる性質がある。潮間帯の空間構造に展開すると転石やひさし等の多いところではニシキウズガイ、平坦もしくは斜面ではタカセガイとナガウニA型に適している。
- ・有力な捕食者はフトユビシャコ、ケブカオオギガニ、ツノヒラムシ、ハリセンボン、ソデカラッパの5種類であった。

（追跡調査）

- ・最も死殻の量が多かったのは16mmサイズを用いた糸満市摩文仁(1)で、1日当りに捕食される推定

* 現在の所属：沖縄県水産試験場八重山支場

個体数は8.8個体であり、歩留まりが低く推移した。当面、8mmサイズはフトユビシヤコ、16mmサイズはカニ類に留意し、また広く水深のあるタイドプールなど環境の安定した場所は食害種にとっても棲み易いため、回避する必要がある。

・人工飼育下から取りあげたばかりの種苗は波浪によって遠くへ飛ばされてしまった可能性が高い。放流後、タカセガイ種苗の移動分散は波浪による転がりとそれが落ち着く場所に合致するパターンを示すが、波浪への順応後、自力で移動分散ができるようになると思われる。

・春の水温上昇期は8mmが約4カ月で24mmに達し、冬場はほとんど成長しなかった。